

W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995
第29号



我が懐かしの喫茶店 あるいはウォルフガング・アマデウス・モーツァルト

モーツァルトへの手紙 (その5)

会員番号 K.618 加藤 明

モーツァルトよ、今回はあなたが天国に召されて1世紀ものちにアメリカで産声をあげたジャズという音楽とそのジャズにまつわる40年も昔のお話です。

あなたがこの時代に生きていたら、間違いなく気のあった仲間と即興的なジャム・セッションで楽しんで演奏したであろうし、ジャズの歴史も大きく変化していただろうことは想像に難くない、そんな思いで語ります。

ある日突然一枚のLPレコードを目の前に差し出されました。

「これを聴いてごらん」。

だれもがみせる他人に好いものを薦めるときあの誇らしげな眼差しが見て取れました。

それは昭和45年春、高卒後間もない私に勃発した大事件の始まりでした。

なぜか私の人生にはいつもこうした決定的な道案内が登場してくるのです。

LPを薦めたのは勤め始めて日も浅い秋田駅前の喫茶店のマスター・F。

なんて響きのいい呼称だろうマスターなんて。その辺にないぜ、内心「マスター！」と呼ぶのも心地よい気分でした。



アルバムのタイトルは《WE GET REQUESTS》、オスカー・ピーターソン全盛期の傑作の一枚。

二十歳の私の耳に初めてモダンジャズという黒い音波が襲撃し、ビート（シュガービートでなく拍子のビート）の種が蒔かれた人生の瞬間でした。

オフ・ビートという名のついた甘くない代わりに、聴くとからだは自然に揺れるマカ不思議な種。

何せ喫茶店には音楽（BGM）がつきものですから、しばらくはこのオフ・ビートの種が詰まったピーターソンのLPに針を落とし続けたのはいうまでもありません。

針を落とす度にどうしようもなく引き込まれていくピュアな世界に浸り、このアルバムの持つ中毒性に冒されるまであまり時間を要しなかったと思います。

のちのち、元来コーヒーとジャズはすこぶる相性がいいことがわかりました。

ペギー・リーの《ブラックコーヒー》があるくらいだし・・・まあ《酒とバラの日々》というスタンダードもあります・・・そうそう《酒とモツの日々》というサビの効いたエッセーも。

どちらもはるか遠く赤道に近いところで生まれたし、色もブラック（こげ茶？）ですし、つまり、私たちの日本にはもともとなかったものですから、余計に好奇心を刺激するものだったのですね。

中毒の前兆を意識したのは、ジャズ特有の歌とリズムの自由な変化やアドリブなどのスリル感が細菌のように体内に潜伏しはじめたからです。

聴くたびに自然にからだのリズムをとり、ノッていくのがわかりました。

しかも、一旦ノリだしたらなかなか止められない、からだは停めても脳の奥では繰り返しのオフ・ビートを容易に消すことができないのです。

それからというもの、「ラウンド ミッドナイト」「バグズ グループ」「サマータイム」など、さまざまなスタンダードが私を縛りつけ、正に中毒患者よろしく秋田駅前のレコード屋に日参してはモダンジャズに類したレコードを買い漁る破目になりました。

余談ですが、20歳から25歳ころまでの5年間で約250枚ほどのLPを買い込んでいました。当時のLPレコードは2000円以上していましたが、薄給の割には随分集めていたこととなります。セロニアス・モンク、マイルス・デイビス、J・コルトレン、MJQ、ビル・エバンス、ソニー・ロリンズ、エラ・フィッツジェラルド、アニタ・オデイ、などなど数え切れない芸達者たちに悩殺状態でした。

当時の喫茶店の勤務日数は月26～27日で、労働時間も世間一般よりも不規則かつ長いものでしたが、音楽好きの私には毎日が愉しくて愉しくて。

ひょっとして人使いの上手いマスター・Fは「あいつを店に定着させるにはレコード一枚あれば充分」と踏んでいたのかしらん。

それはそうと、きっと喫茶店という業態に音楽がお寺のお経のように付き物だったから私は耐えられたし、むしろ願ってもない好工作にありついたらとほくそ笑んでいました。

私にはこのようにジャズに救われた輝やける青色の時代があったのです。

▽

▽

その透明感につつまれた青色の輝きは同じようにジャズの毒に冒されたラッキーな友人の登場で決定的なものとなりました。

私の通った喫茶店は秋田駅前にありまして、夜のアルバイトは近くの秋田大学の学生が大半を占めていました。

その数人の学生のなかにモンクのような歌どころがあり、ジョークが得意でニコニコと他人を受け容れるMくんという協和出身の二枚目がおりました。

Mくんがアルバイトで店に来た頃はすでに完璧なジャズ病のキャリアでしたが、仲間内では知らず知らずのうちにリーダーとなる天性の才能がありました。

Mくんとは2年ほど一緒にコーヒーをたてたり、サービスをしては喫茶店を切り盛りしていたのですが、いよいよ彼が大学を卒業する時節になった初春のもうひとつの大事件は決して忘れることができません。

そのころマスター・Fが喫茶店をチェーン展開する話を持ち出してきて、優秀な人材が欲しいということになったわけです。

そこで、若気の至り、私はMくん「これからも一緒にこの仕事をやらないか？あんとだったら嬉しいだろうな・・・」と持ちかけたのです。

そしたら、Mくんいわく「田舎の親父を説得してくれたら一緒に仕事してもいいけれ

ど・・・」とのこと。

実は彼は小中学校の教員資格をとっており、進む方向はほぼ確定していた状態でしたので、郷里で校長先生している父上が将来性の怪しい小さな喫茶店への就職に対して猛烈に反対することは明明白白だったのです。

でも、ああ若気の至り、そんな事情を無視して、ある日二人そろってMくんの協和の実家まで父上の説得のために車で出かけることになりました。

道すがら、得意のアドリブでああいわれたら、こういおう、こういわれたら、ああいおう、などと車の中で綿密な作戦をたてながら、清水の舞台となる協和の実家に向かいました。

世紀の舞台はすっかり整っておりました、あまりに完璧に。

驚いたことに先方は父上のほかにMくんの叔父さんも同席し、手ぐすね引いて私たちを待ち構えていたのですから（きっと、こうきたらああいおう、ああきたらこういおう、と作戦をたてていたにちがひありません！）。

怖いもの知らずの25歳の私は整然とした床の間に通され、Mくんの父上に稀に見るMくんの能力の高さを強調し、店の将来性についても考えを述べつつ、なんとしても入店をお許しくださるよう立て板に水のごとく、弁舌の限りを尽くして説得にあたりました。

その間、一言も口を割らないMくん、じっと下を向いたままです。

そして、徐々に私が形勢不利を感じはじめたころ、温厚なる眼差しの父上のしわがれた喉口から、「息子を学校の先生にしたい。それが私の昔からの希望なんです。どうかご理解ください。」と切々と訴えられたのです。

依然として沈黙のままのMくんを前に、私は己れの非力さと無理解を恥じながら、次第にこの熱い父上の想いに同調したい気分になっていったのです。

「・・・お父さん、よくわかりました。・・・Mくんこれでいいのかい？」

ややしばらくあってMくんが「はい、加藤さん。・・・すみませんでした」と、むせぶように、眼にかすかに光るものを見せながらの返事でした。

帰りの車のなか、複雑な敗北感を消せないまま私はこの顛末を単なる若気の至りというだけで終わらせることができないことに気づきました。

そこには私の偏狭で思い上がったところが、Mくんと父上に対して、もしかしたらとんでもないご迷惑をおかけしてしまったのではないかと!?という疑念に囚われ、しばし強烈な自己嫌悪に打ちのめされたからです。

しかし、そんな疑念を晴らすかのようなその後のMくんの私へのいつもと変わらぬ自然な関わり方に複雑な思いをいだきつつも、「あれで良かったんだ」という奇妙な達成感のような感慨を次第にいただくことができたのです。

それは小さな喫茶店で共に働き、ジャズを通して深まった友情のもつあわいとも言えるものでした。

その後のMくんは父上の描く理想をきちんと体現し、教育者として多方面で活躍し、県南の伝統ある小学校の校長となって近年勇退されたところでした。

すんでのところ、私のせいで秋田県は一人のハートフルで飛び切り優れた教育者を失うところだったという際どい話ではあります。

▽

▽

モーツァルトよ、後年あなたの作品に再会してきづいたことがあります。

あなたは主にピアノ作品ですがたくさんさんの《変奏曲》を残していますね。

サリエリなど同時代の作曲家の作品や民謡などから素材をピックアップし、あなたが再生させた20曲をこえる変奏曲はジャズのもつアドリ

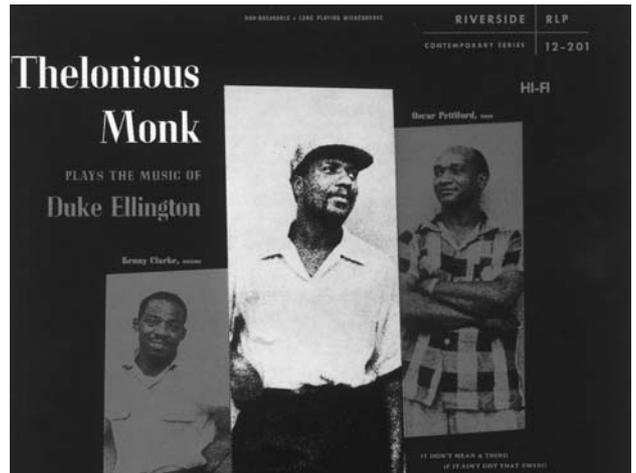
ブによる変奏や曲の発展を連想させるものです。私にはあのトルコマーチの第一楽章の13分にも及ぶ変奏もジャズのハシリに聞こえることがあります（やはりどう聴いてもK331は抜きん出た傑作ですね）。

たとえば、モーツァルト弾きのF・グルダがジャズでも一流のピアニストであったことを思いだしたり、古くはベニー・グッドマンというスウィングの王様であなたの協奏曲の名盤を残したクラリネット奏者もいましたし・・・。

そう、私にはあなたがジャズを先取りしていたようにすら思えるのです。

モダンジャズはスタンダードなどの元歌を担保しながら、リズムや旋律を予想だにしない変化発展を得意とし、さらに様々な楽器が交互に織り成すことで一回限りのスリリングな演奏を体現できる至高の芸術といえるでしょう。

とりわけ、今年が没後30年のアニバーサリーにあたる、ビー・バップを生み出した革新の旗手セロニアス・モンクのピアノ奏法はその後のモダンジャズの歩みに多大な影響を与えたのですが、私がウォルフガング・アマデウス・モンクと名づけたくなる所以です（モンクあります?）。



優れた曲作りと演奏の革新性、リラクゼーションと軽妙感、自由な解放感、音楽の間へのこだわり、お洒落感覚、ジョークを好む遊び心と強い共感志向、そして生涯現役のピアニストという具合に、あなたとモンクにはこんなにもたくさんの共通性があるのですから。

モーツァルトよ、こうしてわが懐かしの喫茶店、輝ける青色の時代の純喫茶《エルザ》の思い出は今も私の深いところで息づいているのです。

我が畏友Mくんはじめ多くの一緒に汗した仲間たちと共に。

end

変ホ長調（ハ短調）のメッセージ

会員番号 K.1 北 嶋 智 仁

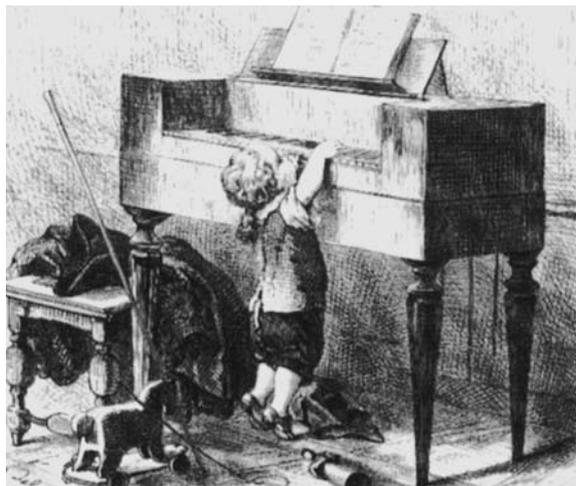
華麗・沈痛・幽遠・典雅 とても難解な表現で語られ論じられる演奏家や作曲家、こうした歴史上の人物の中で、時に際だって輝き続ける著名人「W. A. モーツァルト」に関して、私が記憶する僅かな秘話を語ります。

「35年の生涯」誰しもが「短すぎるー！」と。1781年、モーツァルトのオーストリア・ウィーン生活がスタート!! 現在の常識で言えば、後40～50年くらいは長生きして?と思う訳で、それがわずか後10年余りで人生エンディングと

は・・・?神のみぞ知る余りにも酷い悪魔の悪戯ではなかったでしょうか・・・!?(結果)

モーツァルトの生き様は見事と言うべきか、すさまじいと言うべきか、仮にも自分自身に焦る気持ちがあったとしても、冷静にコントロールして、自分の音楽作品を待ちこがれている聴衆に盛大にお答えする笑顔を忘れていませんでした。作曲家として、演奏家として可能な限りを尽くし過ごし行く日々の生活でした。

それでは時を戻します。1761～62年頃の父親



レオポルドは俗に言う「教育パパ」、弦楽器奏法やヴァイオリンメソッド等を発刊・出版、息子達にはクラヴィーア（ハンマークラヴィーア）から和声法、対位法理論、鍵盤理論まで指導しました。

ところがモーツァルト本人は理屈よりも感性・実践派か、K v.1 f 「メヌエットハ長調」「嘘も方便と・・・？」教育パパは策をあれこれ・・・。思惑通り事は運びパパは大満足ハッピーサプライズ!!、一方、ママ・お姉ちゃん・本人は疲労困憊ベリータイヤード。

モーツァルト一家は幌馬車生活を余儀なくされてきますと、天は二才（二物）を与えてくれるのでしょうか？この後各地を演奏旅行して、帰郷する度にモーツァルトは体調を崩すようになるのです。「人間ドックにでも入って精密検査をやれば・・・？」

そんな心配もさておき、1763年6月モーツァルト家ではいつものように一家挙げての西ヨーロッパ各地演奏・表敬訪問に旅立ちます。ミュンヘン、バイエルン、フランクフルト、ブリュッセル、パリそしてドーバー海峡を渡りロンドン迄行きました。1764年には大バッハの息子クリスチャン・バッハに面会して親交を深めます。

ここでモーツァルトは交響曲第1番変ホ長調 K.16「ロンドン練習帳より」という可愛いサ

ブタイトル付を披露、絶賛を博します。この時の「変ホ長調」は爽快感の様な深い意味を現す調性設定ではなく9歳児の遊び心から出た「真似っ子変ホ長調」でしたが、出来栄えは見事なものだったようです。

息子の健康に不安を感じながらも才能を喜ぶレオポルド!!

何と申しましてもレオポルド先生はヴァイオリンの師匠ですから息子もそれなりの立場は心得、父親へ感謝の意を表す作品を書きます。



モーツァルト19歳（1775年）取り急ぎ協奏曲5曲を発表、「ザルツブルグ協奏曲」と呼ばれ、現在ではヴァイオリン就学者の必修コンチェルト作品であり、数々の演奏会に取り上げられる瑞々しい光り輝く青春モーツァルトが偲ばれる名曲と言われております。

ヴァイオリン協奏曲	青春三部作 別称 「シュトラスブルク協奏曲集」
第3番ト長調 K.216	
ヴァイオリン協奏曲	
第4番ニ長調 K.218	
ヴァイオリン協奏曲	
第5番イ長調 K.219	

その約100年後、ヴァイオリンの名手ヨーゼフ・ヨアヒムは、モーツァルトのヴァイオリン協奏曲に感動し着目、自作のカデンツを作曲して、その自筆のスケッチを御霊に御供えし、本人の承諾を求めるかのように「これで如何ですか・・・？」風なこと、ユーモラスに問い質したとか・・・？」信じられないような面白いエピソードがありました。

「幌馬車の旅」相も変わらず、マンハイムからパリへ出掛けて、気晴らしも含めて、新たな作品を残して帰ってきます。いつしかモーツァルトはウィーンの街にすっかり馴染んでしまいます。

居心地が良いと感じたのでしょうか・・・。そんな浪癖三昧にコロレド大司教は怒り激情！爆発!!。ルンルン気分のモーツァルトは「ア、ウソ～、ナニ！」、こちらはこちらで不満炸裂。

そして自答する「僕は籠の中の鳥になってはいけないのだ～～～!!」

大司教はモーツァルトの契約を破棄、クビ、ここでモーツァルトはサラリーマンからフリーターになります。本当の苦しみはここから！

こういう時、ほとんどのご家庭の両親は結構心配するものです。モーツァルト一家も例外に洩れず、レオポルド・パパが大司教に詫言を入れたりいろいろしますが、如何せん本人既に25歳です。立派な大人でしたね。ここから先は自分で・・・。

<ここでティータイム>

モーツァルトの作品中、ザルツブルグ後半(マンハイム・パリ・ウィーン往復)時代のコンサート用プログラムから

Aプログラム ディヴェルティメント

ディベルティメント第15番変口長調
(1776年) K.287

ディベルティメント第16番変ホ長調
(1777年) K.289

ディベルティメント第17番ニ長調

(1779年) K.334

流行り廃りはいつの時代も同じですな～。
ディヴェルティメントに飽き(秋?)が来れば、次はセレナーデへ

Bプログラム セレナーデ

セレナーデ第9番ニ長調
(1779年) ポストホルン K.320

セレナーデ第10番変口長調
(1781年) 大組曲 K.361

セレナーデ第11番変ホ長調
(1781年) K.375

セレナーデ第12番ハ短調
(1782年) ナハトムジーク K.388
(後に弦バージョンK.406に改編)

セレナーデ第13番ト長調 (1787年)
アイネ・クライネ・ナハトムジーク K.525

セレナーデの時代もいつまでも・・・という訳にはいかず、この流れの続きは協奏曲、そして以前からの交響曲がありました。



普通人の5倍～10倍の仕事をし、身を粉にし、稼ぎまくり、疲労困憊の日々を重ね、交響曲、ピアノ協奏曲、協奏交響曲そして弦楽四重奏・五重奏・演奏会用歌曲等々、何と言っても数々の歌劇(オペラ)・宗教曲(ミサ曲を含む)の傑作が生まれました。そして私が注目した作品は交響曲とピアノ協奏曲で、1780年以降に作曲されたものです。

交響曲雑観

交響曲第33番変口長調 B-dur K.319

楽しく、明るく、ユーモラスな作品として書き上げたけれども、内情は非常に苦渋の灯で、大司教とスッタモンダの戦闘開始でしたね。

交響曲第38番ニ長調 D-du r プラハK.504 (全3楽章) フランスモデル (メヌエット略)

ハフナー以来の序奏付作品

対位法（ポリフォニー）三声部＋通奏低音を持つバロック形式に独自の和声法を加えて完成した画期的作品となる。＜古典派様式の確立＞

交響曲第39番変ホ長調 Es-dur K. 543（全4楽章）

三大シンフォニーの一品！ オーボエを外しクラリネットだけにしたのは訳あり！という説あり。（ミステリアス）クラリネットはモーツァルトの本音で語る自分の気持ち（私的仮説）

交響曲第25番ト短調 g-moll K. 183（全4楽章）

緊張感と悲痛感をガッツリ表現し、4本のホルンで柔和な穏やかさをかもし出しながら第2楽章を通過、第3楽章は交響曲40番への序曲かな。

交響曲第40番ト短調 g-moll K. 550（全4楽章）

弦楽合奏と管楽アンサンブルの基礎力テストの楽章ですか？。弦楽器奏法または木管イメージトレーニングを間違えるとベートーヴェン、メンデルスゾーン、はたまたブラームスに変身してしまうとことあり!!。

交響曲第41番ハ長調 C-dur ジュピター K. 551（全4楽章）

ジュピター＝「かっこいい人」という意味の愛称だって本当ですか・・・？

モーツァルト最後のシンフォニーにしては、ちょっと物足りなくないですかねえ。

ピアノ協奏曲のメッセージとは？

ピアノ協奏曲第9番変ホ長調 Es-dur K. 271「ジュノム」

青春期の代表作、カデンツも自作、21歳の情熱的力作である。第1楽章冒頭からのオーケストラとピアノの掛け合いが特徴的。第2楽章ハ短調の悲歌が美しい。第3楽章ロンド・プレスト中間部のメヌエットがおフランス。



ピアノ協奏曲第14番変ホ長調 Es-dur K. 449

弟子の練習用に作曲したと？、内容はかなり充実感あり、第3楽章のテンポの遅いメノ・モッソから速いピウ・モッソへの変化等は非常に自然なエンディングへの盛り上がりで、珍しい演出である。

ピアノ協奏曲第20番ニ短調 d-moll K. 466

ベートーヴェンがこの作品のカデンツを作曲したことは名高い。父レオポルドへの最後の親孝行の機会となってしまった。

ピアノ協奏曲第22番変ホ長調 Es-dur K. 482

全体的シンフォニックと言える作風で2楽章ハ短調4分の3拍子はやがて第24番に向かって行くのかな・・・？

3楽章8分の6拍子の歯切れの良いリズムは、いつものモーツァルトの表情をうかがわせる。

ピアノ協奏曲第23番イ長調 A-dur K. 488

知名度・人気度共にピアノ協奏曲ではダントツ！ 第2楽章アダージョは短調となって、短いながらもモーツァルトの苦悩が滲み出る。

ピアノ協奏曲第24番ハ短調 c-moll K. 491

オペラ「フィガロの結婚」の20日程前に出来て初演された作品。音楽の内容の違いすぎる種類の作品を同時進行で書き上げるモーツァルト

の心情は計り知れない。第1楽章 第2テーマのクラリネットとピアノの爽快なかけあいを再現、第2楽章変ホ長調 穏やかな挽歌、第3楽章ハ短調 軽妙にして威厳に満ちた変奏が見事です。

ピアノ協奏曲第27番変口長調 B-dur K. 595

「告別の作」と言われ、天国に旅立つ作品として高く評価されているようです。自分自身を慰める為に直に書けた作品として、多くの著名人に評価されています。

音楽大学最初の夏、オーケストラの合宿練習がありました。ヴァイオリンを持つ私の前にはアヴェ・ヴェルム・コルプスの譜面、弾こうとしたところで教官は「配布された音譜より半音高く変ホ長調にして、透明で真っ直ぐな音で演奏しなさい。」と命じた。私は金縛りにあった……。

ご承知の通り弦楽器は#が得意、bは苦手、アヴェ・ヴェルム・コルプスはニ長調、音階の2箇所を#で演奏するのがオリジナル。ところが、半音上げて変ホ長調になると、7音中3箇所をbで、運指も異なる。当然ながら私達は困難に直面、怖々の挑戦ということになりました。

学生達の苦労は報われ、恐怖の「半音移動作業」も無事落着、この「半音違い」が、音楽を劇的に変えたのです。夏山の緑が秋には一斉に紅葉するが如くアヴェ・ヴェルム・コルプスが変容、私達は驚きと感動に浸りました。(専門用語を除いて解説してみました。)

「変ホ長調は何を語るか」世間並みに言うクラシックでは「調性」という表現は避けられません。○○長調、××短調と言うと、瞬時にその調性感から何ものかその曲をイメージするのです。バロック～近現代音楽まで、その役割は結構重要な意味を持ちます。

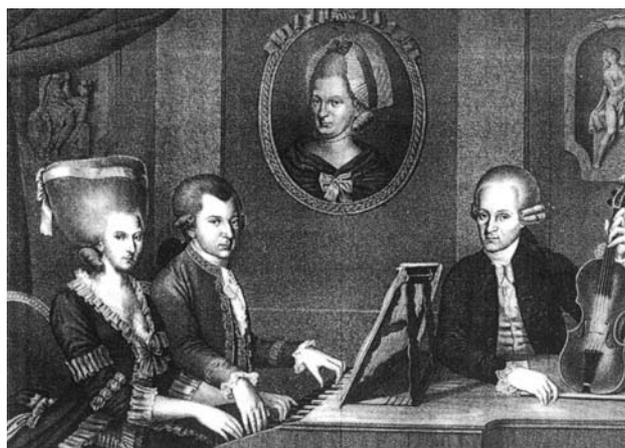
モーツァルト一家の懐かしい思い出の歴史

この作曲家は天才と言われております。けれども鬼才とか異才とか言えば皮肉っぽく聞こえるから無難に「天才」と人々は評価してきました。

普通の一人の男性作曲家は無難な人生を選択せず、メチャメチャ苦渋の日々を「笑いと涙」で、敢えてホールで、しかもステージの表・裏を往来し、一生を乱暴に過ごしました。女に友人に金に人生に降られ振られフラれて35年の生涯でした。

残したのは「賛歌と悲歌の譜面(700曲の魂の財産)」!、懸命に整理して下さった方はケッヘルさんでした。

さて、その中に隠されている「変ホ長調のメッセージ」とは、



モーツァルトが自分の懐かしい思い出、父、母、姉そして墓地に眠る一家の皆様の御霊への感謝、自分自身の誇りと尊厳、敬虔な神への讚美と感謝の祈り、これら全てを変ホ長調(賛歌)とハ短調(悲歌)のメッセージとして語りました。

ちなみに、私の好きな変ホ長調はK.380ヴァイオリンとクラヴィーアのためのデュオソナタです。

入会からを振り返って

会員番号 K.427 鎌田展禎

2009年6月27日午後2時30分——、彌高神社に隣接するフレンチ・レストラン千秋亭は「光林」の扉をモテト『アヴェ・ヴェルム・コルプス』が開いた。伴侶となった美奈子の友人・袴田美樹子さんによる弾き語りの独唱に誘われて私は門出の一步を踏む。

結婚披露宴中の挿入曲で唯一希望した618番目のモーツァルト作品は満座を優しく厳かな雰囲気で包み込んだ。

私の記憶が確かであれば冒頭場面の数時間前に当会代表の加藤明氏と初めてお会いしている。

その人は窓外の眺めを借景として広間に立ち、晴れの日の序奏に相応しいモチーフでモーツァルト讃を詠じられた。当時は和泉姓であったウェディング・プランナーの小野秋子さんから「モーツァルト広場」について前触れらしき説明をされたことに思い当たる。紳士のK会員番号なるものが新郎新婦の入場曲を指定する“618”であったという奇遇がご縁を今日までに繋げてくれた。

私は部下の教育に熱心な飄然たる物腰の“加藤常務”を強く印象に留め、直筆の入会案内を拝受すると加入を即決したのだが、一身上の都合から以後の無音を余儀なくしてしまう。



挙式から一年が経つ頃、私はある出来事を加藤代表に報告した。第一子・恭禎（ゆきさだ）の誕生である。

私事の上申を憚らなかつたのは産声が響いた深更の6月18日という運命的なカウントの所為だ。（同日の加藤代表は受け持ちの番号に因む

記念儀式を執り行っている。※会報第25号参照）またしてもの奇遇によって2010年7月のサマー・コンサートが再会の舞台となった。

開演の挨拶を中断して祝辞と真紅のバラを贈ってくださった加藤代表の心遣いは忘れられない。嗜好を同じくして集う方々の拍手に胸が詰まった。

慶事の陰に失意の日々をあざなつた私は、く豊かさの糧として養うべきは何であるか——、夢心地の中で浮かんだ問いに考え込んだ。

「モーツァルト広場」漂着は振り返るほどに必然の航路であったかのようだ。生得の感傷に努めて現実的な見方を課してはいるものの事象の確率を無視した振る舞いについて不思議の介入を憶測してしまう。没後200年以上の後世にモーツァルトが仕掛けた悪戯のように思えて仕様がなないのだ。



インターネット検索によると私がW. A. モーツァルトという作曲家を意識した端緒は1986年8月24日であるらしい。『ピアノ協奏曲第23番』の第2楽章を挿入した手塚治虫監督のアニメーション番組がテレビ放送されている。

小学生だった私が曖昧な印象より持ち得ない“偉人”の佇まいに囚らずも触った瞬間だ。

そして、“第二の接近”がもたらされる。

モーツァルトの表現世界を観光的に一周した時分、遠慮がちだったはずの小品が私の耳元に囁いた。曰く形容し難い突然の陶醉である。前出の『アヴェ・ヴェルム・コルプス』にモーツァルトの音楽を構成する量子のようなエッセ

ンスを垣間見た（つもりになった）のだ。

私は貧弱な教養を棚に上げて『K618』こそが如何にも正しく“モーツァルト”であると断定した。同曲をこの上なく慈しむ加藤代表との対面が未来に伏線されたのである。

私にとって幸運な一致だった。

加藤代表と私にはもう一つの類似点がある。その実態はさて置き、私もまた“代表”なのだ。

所属団体の名称「茄子地人協会（なすちじんきょうかい）」は宮澤賢治が農業指導者となって設立した「羅須地人協会（らすちじんきょうかい）」にあやかっている。異能・異色の人材を擁すると誇って差し支えなく、結成翌年の日本青年団協議会主催「全国地域青年実践大賞」に推薦応募されて大賞を受賞した。

組織運営におけるタクトの妙技を“加藤盤”に捜し当てた私はマエストロの新天地（潟上市）を学府とするのだ。



加藤代表の言葉は腹に座る。温みを持った実感が私の中に入ってくる。

先方で半生の蹉跎を隠蔽しないものだから、当方は示唆が苦薬であろうと飲み下すほかない。年輪の断層を開けっ広げにした薫陶は時に官能的ですらある。

加藤代表はきつといつだって内なるものの発露を躊躇わなかったに違いない。そうしてきた人の吹っ切れた潔さが滲み出るのだ。その透き通った精神がモーツァルトの音楽に共鳴するのだろう。

モーツァルトと彼の靈感を感受する人とは何処か心の一隅を重ね合わせている。私が『アヴェ・ヴェルム・コルプス』から漏れ聴いた神髄もおそらくは源泉を同じ深奥とするものだ。

私は未だモーツァルトと繁く会話を交わし得る境地に到っていない。彼と一つ宇宙観を棲み家として息遣いまで汲み取る加藤代表に憧憬と羨望の念を蠢かされる。

諸行無常・諸法無我——。私は東洋人らしくブッディズムの真理に縋って兩人の高みを推し量ってみるのだが、モーツァルトが全身全霊を捧げた創造主の啓示とも大同の範囲であろうと察する。映画『アマデウス』のモーツァルトは稚気愛すべき奔放な若者として登場するが、彼の書簡は我執からもまた自由な恬淡たる素顔を偲ばせるのだから……。

モーツァルトの調べが際立った瑞々しさを湛えるのは彼の眼差しが捉える“生命”を精緻に投影された故かもしれない。

モーツァルティアンがしばしば口にする通り、モーツァルトの音楽に普遍性が宿るのならば、作品を媒体にした人と人との邂逅も繰り返される風景である。モーツァルトを無二の心友に欲する資質（ソウル）は悠久の中に自己を位置付けさせることだろう。

〈同時代に居合わせた先達と後進の一期一会である——〉、何とはなしにふと覚らせる加藤代表もまた時空を旅する人である。無尽蔵の親切は所有を知らない人からの“預かり物”だと気付いて腑に落ちた。加藤代表のマエストロは誰だったのか……。私は年を取ることの楽しみを見付けた。



私は「モーツァルト広場」を単に音楽愛好団体とは受け取っていない。加藤代表が精魂を込めて拵えた善意の連鎖する磁場であり、宮澤賢治における「イーハトーブ」でもあろうかと自分なりに解釈するのだ。

末席に連なって僅かの間にも有形無形の恩恵

に与かること甚大であった私は当会の稀有な“有り様”の証人である。

今年、私は長さにおいてモーツァルトの一生を越えた。モーツァルトが早過ぎる晩年に達した円熟の季節を自らの行く手に迎える用意だけは心掛けようと思う。

加藤代表の編成による当会であるから召集された紳士淑女はどんなにか魅力的なことであろう。綺羅星の如き光彩の個性群から、音楽と人生の機微を、世界の豊潤を感じ取りたい。これから当会を賑わすであろう多くの朋友と謀ってその僥倖を待ち構える所存である。

あの人の無邪気な吸収を範にして――。

最後に拙稿を所望して下さった加藤代表に改めてお礼を申し上げたい。入会からの三年と月日を共有した大切な一人一人に思いを致す内省の機会を頂戴した。

櫻庭優佳さん・吉田妃呂子さん・大谷祥子さんの出演を実現させていただき、やはり『アヴェ・ヴェルム・コルプス』を以て幕開けとした「丘の上の音楽祭／モーツァルト広場 in 雄和」について等、書き進めたい事柄は尽きないが、またの折を待つか、我が「茄子地人協会」の前衛的な作家諸君に筆を譲ることにさせていただく。

酒とモツの日々 (29)

会員番号 K.488 佐藤 滋

音楽と「愛」は密接な関係、と感じます。男女の愛（無数にあり！）、夫婦の愛（愛の挨拶・・・等）、親子の愛（ロンドンデリーの歌・・・等）、自然への愛（五月の歌・・・等）、郷土愛（秋田県民歌・・・等）人類愛（第九交響曲・・・等）「愛」を普遍的なものと捉えるなら、「愛」こそが音楽のベースになっている様な気がします。そうそう戦争の時の祖国愛の曲（ラ・マルセイエーズ、多くのロシア民謡・・・等）というのもありました。

政治では「友愛」で失脚した総理がいましたが、その後の迷走から最近では近隣諸国への旅行が、どうにも恐ろしくなってきました。今、「主権」だ「領土」だと声高に唱える人が支持を集めています。でも、振り返ると豊臣秀吉の朝鮮征伐や、日清、日露戦争など、昔から他国を侵略してきたのは一方的に日本でした。「日本固有の領土」についても、ポツダム宣言を受け調

印した9月2日を正式な終戦日と規定し戦勝国の言い分、あるいは講和条約の調印と発効の間隙などを一顧すれば、千島も尖閣も竹島もその扱いは変わってきます。理不尽な言いがかりも多々ありますが、立場と都合で解釈はどのようにも変わるのです。先日TVで若い日本人が、「二世も前のこと～日中戦争のこと～をとやかく言われては未来は築けない！」と憤慨していましたが、それは独りよがりではないか？と思います。遺産に、正（財産）と負（借金）があるように、歴史にも正（誇り）と負（過ち）があり、その両方を客観的に検証し、独善的にならぬよう対処してゆくのが民主政治なのでしょう。戦後処理の曖昧さが今吹き出しつつあると思います。いや、これ以上は支障があるので別室で論議するとしましょう。ゆっくりお酒で和みながら・・・。

クラシック音楽は歴史を大切にす文化です。

以前は、本場物といって外国の演奏を偶像視した頃がありましたが、今は演奏家の国籍を云々する時代ではありません。それは、その音楽が生まれてきた伝統、背景をきちんと学び、共感し受け入れることが作品の歴史に正しく向き合う態度だということが浸透してきたからでしょう。「ジョニ黒」という、以前は手が出なかったウイスキーが庶民にも愛飲されるようになり、ジョニ黒もこんなものか、と置いていたら、先日「ジョニ緑」なる上級品を舐め、驚き恐れ入った次第。これこそスコッチウイスキーの伝統なのでしょう。歴史を検証し、製法を尊び、時代を受け入れ、腕を磨く……。そこに次代に続く歴史の輝きがあるのだと思いました。

こんな極東の片田舎で、モーツァルトを愛聴する人たちがいる。ウィーンの歴史からも風習からも遠く離れ、300年近い時を隔て、全てから一番離れた僻地に、なぜモーツァルトの音楽

が鳴り響いているのでしょうか。それは、ひょっとして「こうあらねばならぬ」の独善的・排他的文化ではなく、ただ一つ「人生を愛そう」という生き方への姿勢が、時空を越えて彼の音楽のなかに脈打っているからではないでしょうか。

「プラハの春」で進駐軍の銃口に花をさす女性の写真が世界を泣かせたことがありました。収容所に流れる「もう飛ぶまいぞ、この蝶々」に涙を誘われる映画がありました。「僕の身体は養分になってロシアの穀物を育てるだろう」と哀しく微笑んで東部戦線に散ったピアノ好きなドイツ兵のお話がありました。悲惨な戦時でもこんな場面に寄り添ってくれるのはモーツァルトの音楽、しかし暴徒やテロ、冷血な覇権主義に最も異を唱えるものこそがモーツァルトの精神でしょう。モーツァルトのベースにある「愛」、それはきっと「人生への愛」なのだと思います。

事務局より

2012年も間もなく終わりをむかえます。皆さまにとってどのような1年でありましたでしょうか。私個人では母校でもあります秋田南高校が創立50周年を迎え、盛大に式典を開催でき、また同吹奏楽部も全国各地で活躍するOB・OGをむかえ50周年記念演奏会を開催できたこと、そしてたくさんのお客さまにご来場いただき、喜んでいただけたことが一番の思い出です。

来る2013年は秋田ディステーションキャンペーンが行われ、全国各地から観光に訪れる方が多くなると思われます。我々秋田県民もおもてなしの心をもって秋田を積極的にPRしてゆきましょう。

年末に向け忙しい毎日が続くと思います。皆さまどうぞお体にはご自愛下さい。

(K575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております（H23年12月現在108名）

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000（諸会費、別途）

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058

又は 本田（事務局）080(1673)8322